The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	和歌山県上富田町方言の文末詞「ニ」
Author(s)	井川, 暁
Citation	阪大社会言語学研究ノート. 2011, 9, p. 46-54
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/23208
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『阪大社会言語学研究ノート』第9号（2011年1月）46-54

和歌山県上富田町方言の文末詞「ニ」

井川　暁

【キーワード】上富田町方言、wh疑問文、推量形、意志形、判断形成

【要旨】

文末詞「ニ」については、三重県伊勢方言などに見られる、接続助詞からの転成文末詞と考えられるものが記述されているが、和歌山県上富田町方言の文末詞「ニ」は、これらとは趣を異にしているようである。本稿は上富田町方言の「ニ」を取り上げ、その意味機能の記述を試みるものである。文末詞「ニ」の特徴は以下のようにまとめられる。

(a) 上富田町方言の「ニ」は、文中に疑問詞が存在し、かつ述部が推量の「ヤロウ」もしくは動詞の意志形である場合にしか使われることはない。

(b)「ニ」は、話し手が不定要素（疑問詞）のために判断や意志が未決定の状態の時に、その判断形成に何か役に立つようなコメントを聞き手に対して要求していることをマークする文末詞である。

(c)「ニ」によって聞き手にコメントを求めているが、あくまで判断を形成するのは話し手であり、聞き手に判断や意志の決定権があるような場合では「ニ」は用いられない。

1. はじめに

和歌山県西牟婁郡上富田町（にしむろぐんかみとんだちょう）で話されていることば（以下、上富田町方言と呼ぶことにする）には、「ニ」という文末詞が存在する[1]。

(1) あの人、いったい誰ヤロウニ。

(2) 今度の会議は、イツヤッタロウニ。

(3) 明日、学校にどうやって行コウニ。

(4) 今日は、何を食べヨウニ。

本稿は、このような上富田町方言の文末詞「ニ」の意味特徴を明らかにし、記述することを目的とするものである。

本稿の構成は次の通りである。まず2節で方言文末詞「ニ」についての先行研究を取り上げる。3節で「ニ」の統語的な性質を確認する。4節でその意味機能を分析し、5節でまとめを行う。

本稿における用例は基本的に筆者の内省[2]によるものであり、表記は「ニ」及びそれが付加される述語形式を方言形（カタカナ）で表記し、それ以外の部分は共通語形（漢字かな交じり）で表記することとする。その上で、非文は*、運用的に不適切な文には#を付け

---

1) 語末が長音化されて「ニー」と発音されることもあるが、特に意味の違いはもたらさないので、本稿では「ニ」で代表させることにした。

2) 筆者の居住歴は次の通り。0-18歳 和歌山県上富田町　18-23歳（現在）大阪府箕面市

て示す。

2.　先行研究

方言文末詞「ニ」については、これまで佐藤（1971）や服部（1995）などで三重県北伊勢方言・中伊勢方言における接続助詞からの転成文末詞と考えられるものが記述されている。服部（1995）では、「ニ」が用いられる例として以下のようなものが挙げられている。（文末の矢印は「ニ」の音調を表わしている。↑は上昇調、↓は下降調を示している。）

(5) 危ナイニ↑

(6) マー、ナットカ（何とか）　ナリマスニ↓

(7) ハヨ　イコニ↓　（早く行こうよ）

(8) イランコト　言ワンヤニ↑　（余計なこと言いなさんなよ↑）
　　イランコト　言ワンヤニ↓　（服部 1995）

上の例のように、伊勢方言の「ニ」は平叙文や勧誘文に生起可能であり、丁寧体にも接続可能である。また服部は「ニ」の接続について、「命令文、疑問文等には後接せず、ヤロ（だろう）にも後接しない」と述べている。その他、三重県北伊勢・中伊勢方言の「ニ」と同じように接続助詞からの転成文末詞と考えられるものとしては、嶺田（2004）で記述されている愛知県東部方言の「ニ」がある[3)]。

一方、上富田町方言の「ニ」は、その統語的な性質から考えると、このような伊勢方言の「ニ」とはタイプが異なるようである。上富田町方言の「ニ」は以下のように用いられる。

(9) どうしてこんなことにナッタンヤロウニ。

(10) 来週の結婚式には、何を着テイコウニ。

このように、上富田町方言では、文中に疑問詞が存在し、かつ述語形式が推量の「ヤロウ」もしくは動詞の意志形である疑問文でしか「ニ」は用いられない。また服部（1995）によると伊勢方言の「ニ」はイントネーションの上昇と下降による意味機能の区別があるが、上富田町方言の「ニ」は常に下降調を取る。

上富田町方言の「ニ」と生起する環境が近いものとしては、地理的には離れるものの、友定（1981）で記述された岡山県新見市坂本方言の「ニー」がある。

(11) イツニ　ショー　ニー。（いつにしようか。）

(12) ナニュー　ショーニー。ヒラー。（何にしようか。昼食は。）

(13) ドギャー　カコー　ニー。　（どう書こうか。）　（友定 1981）

友定は、これらは「ニー」の「問いかけ」の用法であると述べているが、詳しい意味の記述などは行っていない。

以上見て来たように、上富田町方言のような生起環境を持つ「ニ」については、現在のところ詳細な意味記述が行われていない。そこで、本稿でその意味機能を詳しく記述したい。

---

3)　嶺田によると、この「ニ」は動詞終止形、形容詞には共通語の「よ」と同様に接続し、形容動詞の終止形にも接続可能である。

次節以降で、実際に分析を行っていく。

3. 「ニ」の統語的性質

本節ではまず、上富田町方言の「ニ」の統語的な性質について見ていく。具体的には「ニ」が生起可能な文タイプと「ニ」に前接する形式といった観点から、「ニ」が使用される条件について明らかにしていく。

先に2節で述べたように「ニ」は疑問詞を伴う疑問文（以下、wh疑問文と呼ぶ）で、かつ述部が推量を表す「ヤロウ」、もしくは動詞の意志形「～（ヨ）ウ」（以下、本稿では動詞の意志形は「ショウ」で代表させる。）の場合にしか生起することが出来ない[4]。

(14) どうやってこんなもの作ッタンヤロウニ。

(15) 次の総会はいつヤロウニ。

(16) 今から、何をショウニ。

(17) あとは誰を呼ボウニ。

またこれも2節で述べたように、「ニ」は平叙文や行為指示文などといったタイプの文には生起することが出来ない。

(18) *僕も一緒に｛行ク／行ッタ｝ニ。

(19) *あそこの店は｛高イ／高カッタ｝ニ。

(20) *いやあ、すごい雨｛ヤ／ヤッタ｝ニ。

(21) *早く学校に｛行ケ／行ッテ｝ニ。

文のタイプがwh疑問文でない場合、述部が「ショウ」もしくは「ヤロウ」であっても「ニ」は生起不可となる。

(22) *今日のお昼は、カレーライスにショウニ。

(23) *あの人が、新しい先生ヤロウニ。

また、wh疑問文であっても、述語形式が「ヤロウ」もしくは「ショウ」でないと「ニ」を使うことはできない。

(24) あの人、どこに｛*行ク／*行ッタ／*行クノ｝ニ。

(25) あの人、誰｛*ヤ／*ヤッタ｝ニ。

以上のことから、上富田町方言の「ニ」は生起出来る環境の非常に限られた、汎用性の低い文末詞であると言える。

4. 「ニ」の意味分析

本節では上富田町方言の「ニ」の具体的な意味機能の記述を試みる。まず述語形式が「ヤ

---

4) 上富田町方言では、「ヤロウ」と「～(ヨ)ウ」の推量／意志機能の分化は既に済んでいる。「～(ヨ)ウ」が推量の用法で使われることはない。

(a) *明日はきっと雨が降ロウ。

(b) *明日はきっと寒カロウ。

推量の機能は「ヤロウ」が担っている。

(c) 明日はきっと雨が降ルヤロウ。

(d) 明日はきっと寒イヤロウ。

ロウ」の場合に焦点を当て、「ニ」の基本的な機能を分析し、(4.1) 次に複数の行為者の行為を含む「シヨウ」での「ニ」の振る舞いを確認する (4.2)。

4.1.　「ヤロウ」に付く「ニ」

本項では、「ニ」が生起する文が wh 疑問文で、かつ述部が推量の「ヤロウ」の場合、文末に生起する「ニ」がどのような意味を持っているのかを分析する。まずは文末における「ニ」の有無によって、文全体にどのような意味の違いが起こるかを確認しよう。

(26) a. あの人、いったい誰ヤロウ。
　　 b. あの人、いったい誰ヤロウニ。

(26a) (26b) ともに疑問詞の部分 (「誰」) が不定の要素であり、話し手においてはその不定要素についての判断が成り立っておらず、まだ思考途中であることを示している。ここで、(26a) と (26b) の違いについて考えると、(26a) が基本的には聞き手に対する問いかけ性を持たない独話的な働きをしているのに対し、文末に「ニ」が付加された (26b) では聞き手に対する対話的な機能を持つようになるという違いが観察される。

このことは「ニ」の付加された文が、「～と思う」という引用動詞の埋め込み文になれないことからも明らかである。

(27) a. *誰がこんなひどいことをシタンヤロウニと思った。
　　 b. 誰がこんなひどいことをシタンヤロウと思った。

つまり、「ニ」が文末に生起することで、その文は聞き手目当ての発話となる。

しかしながら、(26a) のような文末に「ニ」が生起しない文であっても、それが発話される状況によっては対人的な発話になり得る。

(28) [聞き手の方を見ながら]
　　 あの人、いったい誰ヤロウ。

つまり、聞き手の居るところで聞き手に向かって発話すれば、それは聞き手に対する質問となりうる。「ニ」の意味を記述するためには、「ニ」が付かずに聞き手目当てに発話される文 (＝28) と、「ニ」が付いた文 (＝26b) との違いを明らかにする必要がある。

まず、文末に「ニ」が付かない文が聞き手に対して発話された場合、どのような意味機能を持つかを考える。

宮崎 (2002) によれば、共通語の「だろうか」疑問文 (wh 疑問文では「か」の付加が任意のため、「だろう」も含まれる) は、何らかの意味で話し手にとって不明な情報があるにも関わらず、聞き手に問いかけることによってそれを解消しようとする志向を持たない＜疑い＞の文である、という。つまり基本的には独話的な機能を持つ文であると考えられる。これが対人的に使われる場合について宮崎は、相手が解答を知っているという想定が成り立たないことから、＜聞き手に応答を強制しない質問＞になると述べている。このことについて宮崎は以下のような例を挙げて説明している。

(29) 「高山くんのお母さんはどうして岳がお金を盗ったなんて断言できるんだろう」
　　 私は自分が一番不愉快になっている部分がそのあたりだということに気づいて
　　 そのことをあらためて聞いた。　(椎名誠『岳物語』p.46　宮崎 2002:188 より)

(29) は夫が妻に質問している状況であるが、質問の対象となるのは第三者である「高山くんのお母さん」の考えであり、それを妻が知っているという想定は成り立ちにくい。(29) を聞き手に対して情報を求めるような文にすると、あくまで聞き手が答えを知っていると想定している発話に変わってしまう。

(29') #高山くんのお母さんはどうして岳がお金を盗ったなんて断言できるの？

つまり、「だろうか」疑問文とは、相手が答えを知っているかどうかがはっきりと分からない状況で、もし知っていれば答えを与えてほしいと要求する質問文である、という。

この宮崎の指摘は、上富田町方言の「ヤロウ」についても当てはまる。文末に「ニ」のない「ヤロウ」だけの発話では、聞き手に積極的に答えを求めるのではなく、一緒に考え、知っているなら答えを教えてほしいというニュアンスが出る。

一方、文末に「ニ」が付加された場合、話し手は疑問詞で表される不定要素について判断を形成しようとしている。その判断形成を完成させる上で、聞き手からの何かしらの意見や推測などのコメントが必要であり、それを要求している。したがって (30b) では単に「分からない」という返答は避けられる。

(30) a. A：あいつ、何であんなことシタンヤロウ。
B：さあ、分からないよ。
b. A：あいつ、何であんなことシタンヤロウニ。
B：#さあ、分からないよ。

ただし「ニ」が生起した場合であっても、明確な答えを求めているのではない。あくまで話し手の判断形成のためのヒントを求めているのであって、推測でもいいので何かしらのコメントを聞き手から得られるだろうと話し手は期待しているのである。

(31) A：俺、どこに携帯置イタンヤロウニ。
B：また鞄に入れっぱなしじゃないの。

(32) A：彼女、いつになったら返事クレルンヤロウニ。
B：不安ならもう一回連絡してみたら？

(31) (32) のような発話の状況では、必ずしも聞き手が不定要素についての確実な答えを持っているとは言えない。また、話し手の側も自らの発話に対する的確な答えを聞き手に期待しているわけではない。このような状況でも聴き手は何かしらの推測を立てることは可能なはずで、「ニ」が付くことで、話し手は最低その推測だけでも教えてほしいと思っている発話になる。そのコメントが話し手の判断形成に役立つかどうかは分からないが、とにかく何かしらのコメントを聞き手に要求している発話となる。

ちなみに、wh 疑問文で「だろうか」が用いられる時、いわゆる反語の機能を持つことがある（宮崎 2003）が、このような反語の用法で「ニ」が使われることはない。

(33) a. あんなところ、いったい誰が行くだろうか。(誰も行くものか)
b. *あんなところ、いったい誰が行クヤロウニ。

このことからも、「ニ」は話し手がまだ判断を形成していない場合においてしか用いられないということが分かる。

4.2.　「シヨウ」に付く「ニ」

次に、wh疑問文で述語形式が動詞の意志形「シヨウ」の場合における「ニ」の働きについて見ていく。

まずは共通語を例に取って、意志形を疑問化した形である「しようか」が持つ機能について見てみる。安達（2002）によると、「しようか」は、行為の実行を話し手がまだ決断していないことを表わす独話的な機能が基本であるという。その例として、以下のようなものを挙げている。

(34) 一日の仕事が無事終わり、帰る道すがら「今日は何を飲もうか」と思案する。
家にたどり着き、顔を洗うよりも前にやかんにたっぷりの湯を沸かす。
（渡辺満里奈『満里奈の旅ぶくれ――たわわ台湾――』p.76　安達 2002:32 より）

安達ははっきりと述べてはいないが、「しようか」も「だろうか」と同様に、状況によっては聞き手目当ての発話に移行することが可能であると思われる。

(35) 今日の夕食は、何を食べよう（か）。
(36) 家までどうやって帰ろう（か）。
(37) 今日は誰の家で飲もう（か）。

(35) ～ (37) はいずれも、話し手と聞き手が同一の行為を一緒に行うことが前提となっている発話である。このような状況で、話し手が聞き手に向かって問いかけるように発話すれば、それは聞き手目当ての発話になるだろう。

上富田町方言の場合も、wh疑問文で「シヨウ」が生起した場合、共通語と同様に、文は独話的な意味を持つ。しかし文脈によっては聞き手目当ての発話になるし、「ニ」が生起すると必ず聞き手目当てになる。

(38) [二人でレストラン街を歩きながら]
a. 今日の夕食は、何を食べヨウ。
b. 今日の夕食は、何を食べヨウニ。

(38a) と (38b) はどちらも聞き手に対して発話されたものだと解釈できるが、この場合、(38a) と (38b) にはどのような違いが表れるのかを考える。

まず (38a) は不定要素（「何」）のために話し手の意志が未決定であり、そのことを聞き手に述べることで聞き手に一緒に考えてもらい、また聞き手からの提案も期待している。「ニ」が文末にある (38b) もほとんど同じ意味を表わす。話し手だけでは決定できないため、聞き手からのコメントを期待しているのである。

一方、(38a) と (38b) の大きな違いは、最終的に「何を食べるか」という判断を誰がするか、という点にある。(38) は話し手と聞き手が同一の行為をする（一緒に夕食を食べる）ことが前提となった発話であるが、(38a) の場合、話し手は聞き手と一緒に何を食べるかを話し合い、二人で意見を出し合って判断を決定しようとする。行為の決定権をどちらが持っているというわけでなく、二人で考えて決めようとしているのに対して、(38b) では、話し手は聞き手からのコメントを求めてはいるが、それを元にして判断を決定するのは最終的には話し手である。「君の意見も聞くけど、最後は僕が決めるよ」というように、行為の決定権は話し手が持っているのである。

したがって、「ニ」を生起させた場合、次の (39a) のような会話の流れは不適当で、(39b) のようなAが主導権を握る会話の流れが期待される。

(39) a. A：今日のお昼ご飯は何を食べヨウニ。
B：#カレーにしよう。
A：じゃあ、そうしよう。

b. A：今日のお昼ご飯は何を食べヨウニ。
B：そういえば、駅前にカレー屋ができたらしいよ。
A：じゃあカレーにしよう。

話し手と聞き手が行為者となる場合に「ニ」が使われる例をいくつか挙げておく。

(40) [明日会う時間を二人で決めている]
A：明日は何時集合にシヨウニ。
B：ぼく、夕方から別の予定があるんですよ。
A：そうなの。じゃあ早めに集まろうか。8時半にしよう。

(41) [旅行に行くための交通手段を相談している]
A：大阪までは新幹線で行くとして、そこから和歌山にはどうやって行コウニ。
B：高速バスなら早くて安いそうだよ。
A：じゃあそれにしようか。

(42) [子どもたちが母親の誕生日プレゼントを考えている]
A：花束と、あと何を贈ロウニ。
B：ハンドクリームとかは？
A：それ去年と同じだろ、別のにしよう。

これらはいずれも聞き手に対して判断形成のためのコメントを要求しているが、そのコメントを参考にしつつも決定権は話し手が持っている。聞き手の案を取り入れるかどうかも話し手が決めている。

以上のような「ニ」を使用する場合には話し手が決定権を持つという性質から、「ニ」は、話し手が単独で行い、聞き手が直接関係してこない行為についても使うことが可能である。次の例を見てみよう。

(43) [まだ昼食を食べていない話し手が、すでに昼食が済んだ聞き手に対して]
A：僕、今日は何を食べヨウニ。
B：俺はカレーにしたけど、おいしかったよ。
A：そう。じゃあ僕もカレーを食べようかな。

この例において「食べる」という行為は、話し手が単独で行うものであり、もう食事を済ませている聞き手は何ら関わってこない。しかし話し手の判断形成のための援助を行うことは可能なはずである。ここで「ニ」を用いることで、話し手の判断を決定するために何かしらのコメントを聞き手に求めている文になる。

(43) と同じような例には以下のようなものがある。これらの例でも行為の決定権はあくまで話し手にあり、聞き手からはあくまで判断形成のための助言を求めているに過ぎない。

(44)　A：彼とのデート、何と言って断ロウニ。
　　B：親が倒れたってことにすれば？
　　A：うーん、流石にそれは気が引けるかな。

(45)［就職活動のため、A が初めて一人で東京に行く］
　　A：高速バスと新幹線、どっちで行コウニ。
　　B：新幹線の方がゆったり行けるんじゃないの？
　　A：でも新幹線は高いからなあ。

(46)［外出先で道に迷った A が、携帯電話で B と話している］
　　A：どこに向かって進モウニ。
　　B：まず駅がどっちにあるか聞くべきだと思う。
　　A：じゃあまずは人を探してみるよ。

上に挙げた例とは逆に、行為の決定権が話し手ではなく聞き手にある場合には、「ニ」を使用することは不可能になる。以下の例を見てみよう。

(47)［班で掃除を行う時、班員が班長に］
　　a.　#僕は、どこを掃除シヨウニ。
　　b.　　僕は、どこを掃除シヨウ。

(48)［居酒屋で聞き手の分も一緒に話し手が注文するという状況で、聞き手に尋ねる］
　　a.　#あとは何を頼モウニ。
　　b.　　あとは何を頼モウ。

(47) の例は、掃除の担当箇所を割り振っている班長に対して、話し手が自分の担当を尋ねている発話である。この場合、話し手がどこを掃除するかを決定する権限は班長である聞き手が持っている。(47a) のように、この発話に「ニ」を用いると、班長である聞き手の意見を考慮に入れつつも最終的に判断するのは班員の話し手ということになり、この状況にはそぐわなくなってしまう。(47b) ならば決定権は話し手でなく聞き手が持ちうることになり、この状況でも問題なく発話される。(48) も同様で、注文をするのは話し手であるが、その内容を決めるのは聞き手である。このような場合、文末に「ニ」を伴った発話は不自然となる。

4.3.　「ニ」の意味

以上、述部が推量形の場合と意志形の場合とに分けて、「ニ」の意味機能について分析を試みた。本節で分析したことをまとめると、「ニ」の意味機能については次のようにまとめることができそうである。

(49)　話し手がある不定要素のために自らの力では判断を形成できない状況で、聞き手に対して、話し手が判断を形成するための何らかのコメントを期待している。

「ニ」が推量と意志の wh 疑問文でしか現れないのは、「ニ」の機能が大きく関係してくるからだと考えられる。つまり、wh 疑問文であっても、述部が「ヤロウ」「シヨウ」以外の時は、基本的に聞き手に対して明確な答えを求める発話となり、話し手だけで判断形成を行うことを放棄している。このような文は、判断形成のための援助要求を表す「ニ」の機

能とは相いれないため、「ニ」が現れないと考えられる。

5. まとめ

以上本稿では、上富田町方言の文末詞「ニ」を取り上げ、その意味用法について記述を行った。上富田町方言の「ニ」の用法は次のようにまとめられる。

(a) 上富田町方言の「ニ」は、文中に疑問詞が存在し、かつ述部が推量の「ヤロウ」もしくは動詞の意志形である場合にしか使われることはない。

(b)「ニ」は、話し手が不定要素（疑問詞）のために判断や意志がまだ未決定の状態の時に、その判断形成に何か役に立つようなコメントを聞き手に対して要求していることをマークする文末詞である。

(c)「ニ」によって聞き手にコメントを求めているが、あくまで判断を形成するのは話し手であり、聞き手に判断や意志の決定権があるような場合には「ニ」は用いられない。

今後の課題として、本稿では取り上げなかった、疑問文に現れる他の文末詞も分析し、それらと対照させながら「ニ」のさらに深い記述を行うことが必要だと思われる。また共通語の「ね」が述部に「だろう」や動詞の意志形をもつ wh 疑問文で使われた時の働きについても分析し（上富田町方言でも文末詞「ネ」が使用される場合があるが、このような文で「ニ」代わりに「ネ」が使用されることはない）、「ニ」と対照させることで、さらに「ニ」の特徴をつかむことが出来ると考える。

【参考文献】

安達太郎（2002）「意志・勧誘のモダリティ」『新日本語文法選書 4　モダリティ』pp.18-40 くろしお出版.

佐藤虎男（1971）「転成文末詞『ニ（ニー）』について」『国文学攷』57，広島大学.

友定賢治（1981）「転成文末詞「ニ（ニー）」の分布について—中国地方を中心に—」『島大国文』10，島根大学.

服部匡（1995）「終助詞の機能について—伊勢方言のニの用法の記述と「よ」との比較—」『言語学研究』14，京都大学.

嶺田明美（2004）「愛知県東部方言の文末詞の研究（3）—ニの用法について—」『学苑』762，昭和女子大学.

宮崎和人（2002）「質問と疑い」『新日本語文法選書 4　モダリティ』pp.174-202，くろしお出版.

————（2003）「＜意志＞と＜推量＞の疑問形式」『岡大国文論稿』31，岡山大学.

いかわ　さとる（大阪大学大学院生）

satoru-ikawa84@hcn.zaq.ne.jp